

---

# 家族ごっこ。

如月ゆり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

家族「つ」。

### 【Zコード】

N6105C

### 【作者名】

如月ゆり

### 【あらすじ】

何にも無い家族の日常。でも僕たちは他人同士。これは悲しくも優しい僕の家族の物語である。

## 第零話・僕の家族

ジココリリ…！

「……………」

ジコココココココココリリ…！…！

「…ひー……………んん」

ぱちん。

「ふああ。眠ー…。支度……………しなきや」

『第零話 僕の家族』

眠い目を擦りながらカーテンを開けて外を見る。

道端には雨によつて落ちてしまつた桜の絨毯。

コンクリートで出来た無機質な地面が白く染め上げられていた。

「……………雨のバカヤロー」

せつからくの桜が。

こんなことならこの前の日曜に行つておくんだった。  
明後日に行つてもこのぶんじゃおおかたが散つてゐるだろ？  
せつからく母さんが弁当を氣合い入れて作るつて言つてたのに。  
思わずため息。

そもそもこの前の日曜に行く予定だつたのを父さんと一人で野球観戦に行きたいからと断つたのは僕だ。

確かにあの日のゲームは楽しかつたけど、花見が潰れてしまつとは

……。

アサが怒る姿が田に浮かぶ。

(お兄ちゃんのせいなんだからつ)

はあーーー。何ことだ。また口を利いてもらえないなくなる。

裕ぐーん、まだ寝てるのー? そろそろ支度しなきー? ?

うわっ! やうだつた! 早く下に降りていかない? アサが起こしてしまつ。

朝からそんなハードな展開は」めんだ。

パジャマを脱ぎ捨て制服に着替える。僕は家族の待つリビングへと降りていつた。

「あら、おはよう。裕くん。やつと起きたのね。」

「おはよ、母さん。もう起きてたよ。ただ、少しボーッとしてただけ」

下の階に降りていくと、まず先にキッチンの母さんが僕に気づいた。一体何時から起きているんだろ? キッチンには朝ごはんのための道具が散らかっていた。

相変わらず片付けるのが苦手な人だ。

「まあ。また遅くまで本を読んでいたんでしよう。田に隈が出来ているわ。あれほど夜更かしさはしちゃ駄目つて言つてゐるのに。そんなことだから朝から元氣ないのよ! もう。朝ごはん用意してあるわ。食べて少し田を覚ましなさい? 」

それだけ言つと それじゃあ陽太さんを起こしてくるわ、と言つて寝室へと向かつていつた。

父さんも朝が苦手な人だ。

リビングまで出てきてもまだ田は覚めていないらしく、朝食を食べこぼしてくる姿を偶に見る。

僕はそこまで酷くないのだが、やつぱり朝は苦手だ。  
昼から学校に行けたらどんなに素晴らしい事か。

そんなくだらない事を考えながらダイニングへと向かう。テーブルには所狭しと朝食の山。

キッネ色にこんがりと焼けたトースト

湯気の立つミニネストローネ

しつかりとした焼色のグラタン

揚げたてのハツシユポテトに唐揚げ

僕好みの半熟の目玉焼き

極めつけに母さん特製のフルーツヨーグルトと言つた具合だ。  
思わず胃もたれしそうな量にメニューがズラリと整列していた。  
それを妹、朝美が黙々と食べている。

「おはよ、アサ。…………毎朝ながら、よくその量が食べられるね」「ん？お兄ちゃんか。おはよ。今日のグラタン、ミートソースが入つてる。なかなかこれも美味しいよ。少しくらい食べたらいいのに、勿体無いなあ」

無駄にキラキラと輝く朝食に心なしか胃がむかむかしてきた。

「…………めん、母さん。僕には無理だよ。

「…………無理。勿体無いならアサが食べてよ」

「ホント？ホントにいいの？？」

「どーぞ。好きなだけ」

「やつたあああ！」

朝美は本当によく食べる。僕の数倍は食べるんじゃないだろうか。  
その細い身体にどこまで大きい胃袋が入っているのかは謎だが、まあ健康みたいだし僕にはそれでいいかなと思つ。

「おはよっ……」「父さん。おはよっ

「おはよっ……」

「あっ、おとーさん！おはよ」

ふわあ、と欠伸をしながらやつてくる父さん。

珍しくいつもより田が覚めているらしく、母さんにコーヒーを頼んでからダイニングにやつてくるとおひつ、とテーブルの上 と云ひぬの朝食のパレードを見つめてゲンナリとした顔をした。

（……やかさん。またか）

（また、だね。父さんからも「ちよつと向とか言つてよ。見てるだけで食欲減退）

（う、うん。そうだねえ……）

こやこそと一人で会話する。

母さんが料理を多く作りすぎるのはこつもの事として、朝食だけは勘弁してもらいたい。

僕だつて胃痛を起こすに学校に行きたいのだ。

「ややかさん。ちよつと」

「なあに、陽太さん？ あ、分かつたわ。アレでしちつ？ 用意しておいたわ！」

「え、やひじやなくて……つて、アレ？」

「はい、どひど」

無駄に輝く笑顔と共に母さんが持つてきたもの。

ジューサーっぽいの緑色の液体。

「や、ややかさん……。一応念のために訊くけど、これは……？」  
汗をだらだら搔きながら引きつった顔で問いかける父さん。今きっと父さんの脳内では「嫌な予感」と云ふ言葉がテロップ表示されている筈だ。哀れ。

「何つて、決まってるじゃない陽太さん。青汁よ。あ・お・じ・るー」の前の健康診断でお医者さんに野菜を多く摂つて下せこつて言

われたんでしょ？ 野菜と言つたら青汁じゃない？ 作つてみたの！  
さあ、どんどん飲んじゃつてね！」

た。ひさびしさ。あーあ。

そんな事を母さん口説したらどうなるのか予想ぐらうつむかのなに。

(おとーさん、馬鹿だね)  
(しつ。一人に聞こえるよ)

こうなつたら関わらない方が

僕は用意された朝食の中から比較的に少量盛られているヨーグルト

卷之三

[REDACTED]

沈默

४८

1

1

更に沙黙

卷之三

は 1

押し負けた。隣では朝美がうわあ、といった目線で父さんを見つめ

激しく同感だ。

「あら、一人も飲んでいいのよ？注いであげるわ」

「……………つ……………げほつ……………げほ……………」

「えええーと、僕はここよ。うん。ほら、もうこんな時間だし！そ  
ういえば今日は朝から委員会の仕事あるし！—もう行かなくっちゃ  
ー。」ひやうせー！—

「「ほつ、ほつ—…あ、アサも今日は口直だからもう行へー。」ひ

そうさま！—」

二人して脱兎の如くリビングから遠ざかる。

父さんが恨みがましそうな目でコッチをみているけどそんな事は気  
にしていられない。

朝から胃痛もごめんだが、青汁の方がもうどりごめんだ。  
こうしちゃいられない。

もともと委員会の仕事なんて今日は無かつたが家に居ると危険な氣  
がするので僕は学校に向かうこととした。

急いで支度をしてから玄関に向かうとそこには朝美がいた。

「あーああ。朝食食べ損なっちゃったよ。おとーさんのせいだ…

…！」

「あれだけ食べたんだからもうこいんんじゃないかと僕は思つた  
ね…」

「ま、いつかあ。学校でお弁当たべよつと」

どんだけ食べる気だ、この娘は。

「…………まあいいけどね。じゃあ、行こうか。行つて来ますー。」

「こつてきまーす！—」

玄関から飛び出して朝美は左へ、僕は右へ。

また今日が始まつていぐ。

\*\*\*\*\*

つい最近から始まつた日常がそこにはある。

挨拶。

家族団らんの食事。

笑い顔も、泣き顔も、諍いも。

ついこの間から始まつた事。

僕たちは赤の他人だつた。

姿も  
声も

存在も何一つ知らなかつた間柄。

アルバイトという名のもとに出会ひつまでは。

僕たちは「赤の他人が仮初めの家族を演じ、どこまで親密になれるか」という研究を目的にアルバイトとして雇われた。

両親を含め家族を持たず、現在就労状況が無職のものに限り応募資格があるアルバイト。

契約期間は一年間。

その期間の住む場所と働く場所や学校は与えられ、集められた人間で家族となり暮らす。

監視力カメラや盗聴器がある訳でもなく、定期的に観察者が家を出入りする以外は普通の生活を営めばよい。

約束事はただ一つ。

「己の過去を明かさない」という約束でのみ僕たちは暮らしていた。

家族を失い、  
やるべき事も無く、  
そんな中で出会つた赤の他人同士がする『家族』。』。

これは悲しくも優しい僕たち家族の物語である。

## 第零話・僕の家族（後書き）

連載始動ー！

これからよりじくお願い致します（ペレット）  
頑張つて…、更新していく予定です…。

裕也「頑張つてね。僕も応援してやるよ」

如月「うん…！がんばる…！」

裕也「そして母さんのご飯の量を少し減らしてくれると嬉しいんだ  
けど」

如月「裕也くん…！…その微笑みが黒いよ…！」

読んで下さった方！どうもありがとうございます。

## 第壹話・全ての始まり

懐かしい光景。

僕たちの始まりの日。

『第壹話・全ての始まり』

「リリの中で待っていてね」

「はい」

応接室の前のような場所に連れてこられる。では、と言つて去つていいく男を見送つて僕は恐る恐る部屋の扉を開けた。

ギィと軋んだ音を立てて開く扉。

扉の隙間から顔を覗かせてみるも、部屋の中には誰もいなかつた。革張りのソファー。

硝子製のテーブル。

高価そうな置物が並ぶ広い校長室のよつな場所だ。

(どうしよう……)

そわそわする。

こんな立派な部屋に入ったことが無いので落ち着かなかつた。立つていても仕方が無いのでソファーに腰を落ち着ける。

そわそわ。

それでも落ち着かない。

(……場違い。僕何でこんな部屋にいるんだっけ……?)

＊＊＊＊

話しは2ヶ月前に遡る。

求人欄で見つけたアルバイト。

一年間、疑似家族をする人材募集の広告だつた。  
求人欄には何とか計画、とかいう大層な名前が付けられている。  
何でも将来性の高い研究だそうだけど、そんな事僕には関係無かつた。

（衣食住と教育の保証…）  
僕が目に付いたのはそこだ。

元々、今通っている中学を卒業したらすぐに家を出て働くつもりだった。

そうしなければいけなかつたから。

誰に何て言われようとも。

でもお金も無く、住む場所の検討もついていない。

僕にとってこのアルバイトは最悪な状況で見つけた希望の光のようなものだ。

考える間も無く僕は縋りついた。

一親等以内の親族がいないということ。

今年の4月からの就労状況が無職だということ。

年齢も条件もぴつたりだつた。

そして、

（擬似家族……か）

氣味が悪い程の偶然。

それに縋るしか僕に生きる道が無いということも含めて。

運命だらうか?  
偶然だらうか?

それとも

僕の過去さえも必然だつたのだろうか?  
答えは、未だに出ていない。

『みずたにゅうや 水谷裕也様 結果通知書在中』

応募してから採用通知が届くまでは早かつた。

3度の面接と1回の筆記試験。

その後、僕の下には採用通知とともに規約やら契約書やらといつ書類の山が届けられた。

その中に入っていたもの。

アルバイト開始日程と集合場所の地図。

そして僕は今その地図に書かれていたビルの中の一室にいる。

（）で話は頭に戻るのであった。

（どうしよう…）

緊張して手が冷たくなつていいくのがはつきりとわかった。  
嫌な汗が背中を伝う。

一年間一緒に暮らす人。

緊張の度合いでいうと、クラス替えとかそういうレベルではない。

どうしよう。

そればかりが頭をよぎって何も考えられない。

好かれる自信はあった。

ただ、心配は別にある。

どうしよう。

(もしかしたら、今度は……)

ノンノン。

そこまで考えたとき、扉がノックされる音が部屋に響き渡った。

## 第壱話・全ての始まり（後書き）

ようやく一話分、更新…！

おめでとう、自分！

裕也「その割には進んでいないけどね」

如月「うつ…！（泣）」

裕也「見てくれる人が意外にも多いんだから、もう少し頑張つてよ  
ね」

如月「うう…つ。……ハイ」

裕也「まあ、今日はこの辺で許してあげるよ。次回はもっと頑張る  
んだね」

如月「（何で上から目線…？）…分かりましたです」

お読みください、有難う御座いました！

更新速度は龜並みですが、次話もお付き合い下さると嬉しいです！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6105c/>

---

家族ごっこ。

2010年10月20日16時10分発行